

保育園児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因との関係

著者	井上 和博, 柳田 信彦, 深見 真也, 深野 佳和
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要=Bulletin of the School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
巻	24
号	1
ページ	35-42
別言語のタイトル	The relationship between childcare stress and its related factors among mothers with nursery school children
URL	http://hdl.handle.net/10232/23892

保育園児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因との関係

井上 和博¹⁾, 柳田 信彦¹⁾, 深見 真也²⁾, 深野 佳和¹⁾

要旨 本研究の目的は、子育て中の母親の育児ストレスの状態、育児ストレスに関連する要因の状況、及び育児ストレスの程度とそれらの要因との関係を明らかにすることである。保育園に通う子どもの母親163名を対象に、母親から見た自身の育児ストレス、対処行動、母親役割、子どもの問題行動、周囲からの支援（ソーシャル・サポート）について調査した。その結果、育児ストレスは子どもに対しては強くなかったが、就労による社会的活動の制限や経済的ひっ迫感に対してはストレスを感じていた。また、育児ストレスの程度と関連要因との関係では、その影響の度合いが要因によって異なることが明らかになり、子どもの状態及び調整的コーピングについては育児ストレスへの関与が少なかった。

キーワード： 育児ストレス、対処行動、母親役割、子どもの問題行動、ソーシャル・サポート

【緒言】

母親にとって育児は、喜びや楽しみなどの満足感を持っているとともに大きな不安やストレスを伴うものである。今日、核家族の増加、近隣者との関係の希薄化、乳幼児に接する機会の減少などに伴う地域社会の変容といった育児環境の変化に伴い、子育て中の母親は様々な不安やストレスなどの問題を抱え生活している^{1,2)}。母親の育児ストレスが高すぎることは、母親だけでなく、子どもの発達に影響を及ぼす可能性がある³⁾。そのため、子どもの健やかな発達の側面からも、母親の育児支援の必要性が強調されている。

また近年、発達の視点及び生活動作の視点を持つ作業療法士において、乳幼児健診、保健センターでの親子教室や保育園・幼稚園など子育て支援への参加が求められてきている⁴⁾。作業療法士は子育て支援を考える上で、子ども自身はもちろん、母親がどのように育児を行い、育児に対してどのような不安やストレスを感じ、またどのような困り感を持っているのかなどを把握しておくことは不可欠である。

LazarusとFolkmanは日常生活の中で起きるある出来事

に対する認知的の評価が対処行動を決定し、その結果がストレス反応として表れるという心理学的ストレスモデルを提唱している⁵⁾。ストレスを抱える母親へのサポートを考えたとき、育児中の母親のもつストレスの内容と程度、そのストレスにおける関連要因やサポート状況を明確にすることが育児支援にとってとても重要と考える。

育児ストレスに関連する要因として3つの側面が挙げられる。第1は母親の意識であり、対処行動、母親役割などが挙げられる。対処行動に関しては、コーピング方略によってストレス反応に違いがみられ、回避型コーピングより積極的なコーピングがストレス低減に効果がある⁶⁾。また、ストレスを諦めや放棄ではなく、肯定的に捉えることができるように意味づけをして、解決方法を提示していくことが支援に有用であると報告されている⁶⁾。母親役割では、積極的・肯定的に受容している母親ほど状態不安、抑うつが弱く、消極的・否定的に受容している母親ほど状態不安が強い⁷⁾。また、育児ストレスは母親のパーソナリティとしての不安になりやすさをベースに、母親役割の非受容感が影響していると報告されている²⁾。しかし、藤本ら⁸⁾は状態不安が一般成人

¹⁾鹿児島大学医学部保健学科臨床作業療法学講座

²⁾鹿児島大学大学院保健学研究科

連絡先：井上和博

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/fax 099-275-6737

E-mail: inoue@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

女性より少し高くても子どもを十分に受容し、育児を促進する可能性がある」と述べている。

第2は子どもに対する意識であり、母親が子どもの行動をどのように認知しているかなどが挙げられる。つまり「子どもの聞き分けのない行動」や「子どもにまわりつかれること」などが育児ストレスになっている^{1,9)}。また、有職の母親についての研究³⁾では、親側面のストレスは専業主婦が高かったが、子どもの側面に関しては有職の母親の方が高い結果であったと報告されている。

第3は周囲に対する意識、いわゆるソーシャル・サポートである。ソーシャル・サポートとは「家族、友人、隣人、同僚や専門家など、ある個人をとりまくさまざまな人からの有形、無形の援助」「援助を必要としている人や悩みを抱えている個人に対して、周囲の人々から与えられるサポート」¹⁰⁾とされている。育児ストレスとソーシャル・サポートとの関係では、夫と家族のサポートの重要性が多く報告されている^{3,11-13)}。夫の育児参加は、母親の育児に対する肯定感を高め、制約感を低くする¹⁴⁾。また、新道ら¹⁵⁾は、世代間の違う母親の子どもの調査において、子育て支援・協力者として選ばれたのが第1位「夫」、第2位「実母」と報告している。一方、夫や家族のサポートだけでは不十分であり、母親の様々なサポートニーズを母親を取り巻く人々で役割分担し、引き受けていくことが必要であり、友人、育児サークルや専門家など家庭外のサポートの重要性も述べられている^{11,13)}。

このように先行研究より、母親の育児ストレスは複数の要因と関連性があることが明らかになっているが、同一の対象において、どのような要因がどの程度育児ストレスに関係しているかを多面的に検討したものは少ない。

従って、本研究の目的は、保育園に通う子どもを持つ母親を対象に

- (1) 育児ストレスの状態
- (2) 育児ストレスに関連する、
母親の意識（対処行動、母親役割）
子どもに対する意識（子どもの行動）
周囲に対する意識（ソーシャル・サポート）の状況
- (3) 育児ストレスの程度と ～ との関係
を明らかにすることである。

【方法】

1. 対象及び調査期間

A市内4カ所の保育園に通う子どもの母親235名であり、2013年10月から11月で実施した。

2. 手続き及び倫理的配慮

鹿児島大学医学部疫学・臨床研究等に関する倫理委員会の承認（承認番号：第262号）を得た後、各施設長に

研究計画書と調査票を持参し協力を得た。保育士を通じて研究目的と得られたデータを研究目的以外では使用しないこと、結果は統計的に処理し個人が特定されない旨を明記した文書を添付し、同意の得られた母親に配布した。調査票は無記名自記式とし、施設に設置した投函箱にて回収した。

3. 調査内容

①対象者の属性

母親の年齢、子どもの人数、祖父母との同居の有無、就労の有無、子どもの年齢

②育児ストレス（表1）

中島ら¹⁶⁾の育児ストレス認知尺度16項目で構成し、回答は「最近1か月間の子育てに対して感じていること」を問うものである。

③対処行動（表1）

岡田ら¹⁷⁾の育児ストレス・コーピング尺度8項目（逃避的コーピング4項目と調整的コーピング4項目）で構成し、回答は「子育てでの様々な問題に対しどのように対応しているか」を問うものである。逃避的コーピング項目では得点が高いほど対処行動として逃避的、調整的コーピング項目では得点が高いほど対処行動として調整的であることを示している。

④母親役割（表1）

大日向ら¹⁸⁾の母親役割受容尺度12項目（積極的・肯定的受容6項目と消極的・否定的受容6項目）、及び土肥ら¹⁹⁾の母親役割達成感尺度10項目を合わせた22項目で構成した。母親役割受容尺度は、「自分自身が母親であることをどのように受け止めているか」を問うものである。積極的・肯定的受容項目では得点が高いほど母親役割の受容が積極的肯定的で、消極的・否定的受容項目では得点が高いほど母親役割の受容が消極的否定的であることを示している。母親役割達成感尺度は、「子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度」を問うものである。

⑤子どもの行動（表1）

種子田ら²⁰⁾の子どもの問題行動測定指標9項目に、独自に作成した多動項目1項目を追加し10項目で構成し、回答は「1ヵ月間に子どもがとった行動の頻度」を問うものである。

⑥ソーシャル・サポート（表1）

北川ら²¹⁾のソーシャル・サポート尺度：A) 夫婦親密性サポート（6項目）、B) 家族サポート（14項目）、C) 実行されたサポート（11項目）の31項目で構成した。夫婦親密性サポートは「母親が感じている夫との日頃の様子」を問うもので、家族サポートは14のサポート源別に、「日頃母親が子どもを育てる上でのサポートの程度」を問うもので、実行されたサポートは「母親が実際どのよ

表1 調査内容（使用した尺度）

	要因	尺度	下位尺度	項目数	評価段階	評価点	出典
母親の意識	育児ストレス	育児ストレス認知尺度		16	5	0~4点	中島ら ¹⁵⁾
	対処行動	育児ストレス・コーピング尺度	逃避的	4	3	0~2点	岡田ら ¹⁶⁾
			調整的	4	3	0~2点	
	母親役割	母親役割受容尺度	積極的・肯定的	6	4	1~4点	大日向ら ¹⁷⁾
			消極的・否定的	6	4	1~4点	
	母親役割達成感尺度		10	5	0~4点	土肥ら ¹⁸⁾	
子どもに対する意識	子どもの行動	子どもの問題行動測定指標		9+1	5	0~4点	種子田ら ¹⁹⁾
周囲に対する意識	ソーシャル・サポート	ソーシャル・サポート尺度	夫婦親密性	6	4	1~4点	北川ら ²⁰⁾
			家族	14	4	1~4点	
			実行された	11	4	1~4点	

うなサポートを受けていたか」を問うものである。

表2 対象の属性

属性	Mean ± SD
母親の年齢	34.3 ± 5.0歳
子どもの人数	2.0 ± 0.8人
祖父母との同居あり	10名 (6.8%)
就労している	144名 (98.6%)
子どもの年齢	48.2 ± 17.2カ月

4. 分析方法

各尺度は内的整合性を信頼係数（Cronbackの係数）にて確認した後、記述統計及びMann-Whitney-U検定を用いて、危険率5%未満を有意として検討した。

【結果】

153名（回収率65.1%）から回答が得られ、そのうち記載漏れなどが無い回答146名（有効回収率62.1%）を分析対象とした。

1. 対象者の属性

結果は表2の通りである。

2. 育児ストレス

結果は表3の通りである。質問内容において、「いつもある」～「時々ある」の回答数の割合では、「子育てのために、自分自身の自由な時間がとれない」が56.8%、「子育てのために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている」が45.2%、「子どもの子育てには費用がかかりすぎると感じる」が38.4%、「子育てに必要な費用が家計を圧迫していると感じる」36.3%と高い割合を示し、「子育てがいつまで続くのか、不安になる」が6.2%、「子育てそのものに、苦痛を感じる」が9.6%、「子どもを見るだけでイライラする」が10.3%、「育てに疲れて、育児を放棄したくなる時がある」が12.3%と低い割合を示した（図1）。

3. 各要因

① 対処行動

結果は表3の通りである。逃避的コーピングの質問項目別の平均得点は0.6点であり、「そうしない」～「どちらでもない」の間であった。調整的コーピングの質問項目別の平均得点は1.5点であり、「どちらでもない」～「そうする」の間であった。

表3 各尺度の平均得点及び標準偏差、得点範囲、質問項目別の平均点及び標準偏差

	得点の Mean ± SD(点)	得点の 範囲(点)	質問項目得点の Mean ± SD(点)	
育児ストレス認知尺度	15.7 ± 10.8	0 ~ 57	1.0 ± 0.5	
育児ストレス・コーピング尺度	逃避的コーピング	2.5 ± 1.8	0 ~ 8	
	調整的コーピング	6.0 ± 1.8	1 ~ 8	
	母親役割受容尺度			
積極的・肯定的受容	18.8 ± 3.7	8 ~ 24	3.1 ± 0.4	
消極的・否定的受容	11.7 ± 3.3	6 ~ 19	1.9 ± 0.5	
母親役割達成感尺度	42.2 ± 5.2	23 ~ 50	4.2 ± 0.5	
子どもの問題行動測定指標	8.2 ± 5.9	0 ~ 27	0.8 ± 0.6	
ソーシャルサポート尺度	夫婦親密性サポート	18.8 ± 4.3	6 ~ 24	3.1 ± 0.2
	家族サポート	32.9 ± 6.0	14 ~ 50	2.4 ± 0.8
	実行されたサポート	29.0 ± 8.0	11 ~ 44	2.6 ± 0.2

目別の平均得点は1.5点であり、「どちらでもない」～「そうする」の間であった。

② 母親役割

結果は表3の通りである。母親役割受容尺度の積極的・肯定的受容の質問項目別の平均得点は3.1点であり、「ややその通りである」の段階であった。消極的・否定的受容の質問項目別の平均得点は1.9点であり、「やや違う」の段階であった。また、母親役割達成感尺度の質問項目別の平均得点は4.2点であり、「よく当てはまる」の段階であった。

③ 子どもの行動

結果は表3の通りである。質問項目別の平均得点は

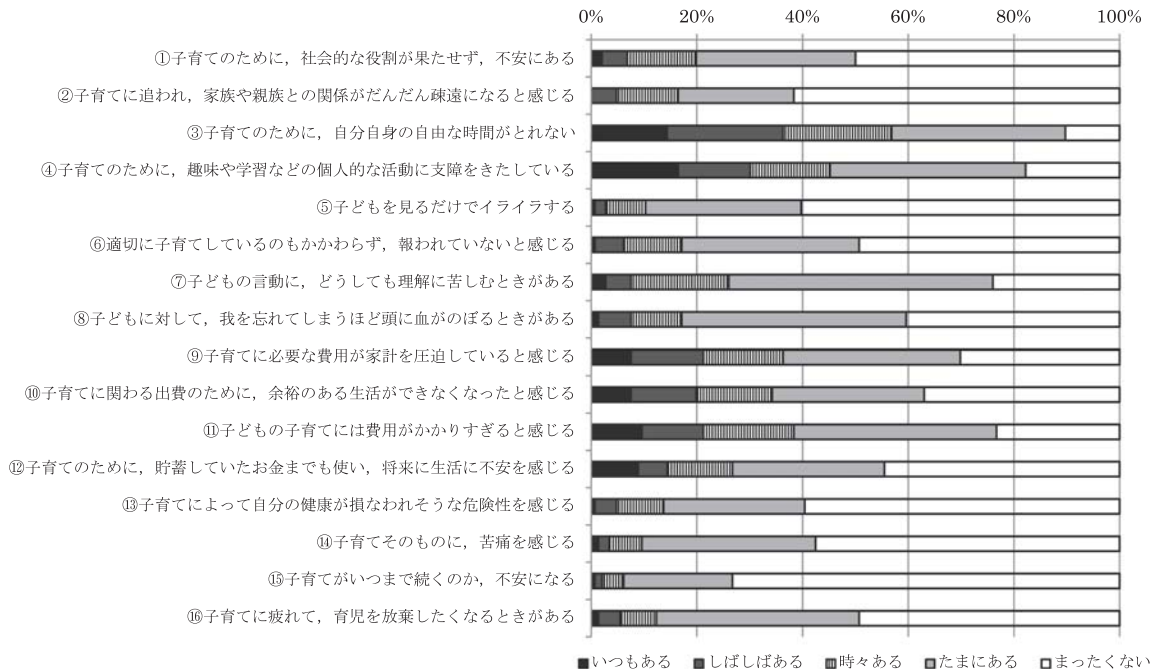


図1 育児ストレス認知尺度の回答分布

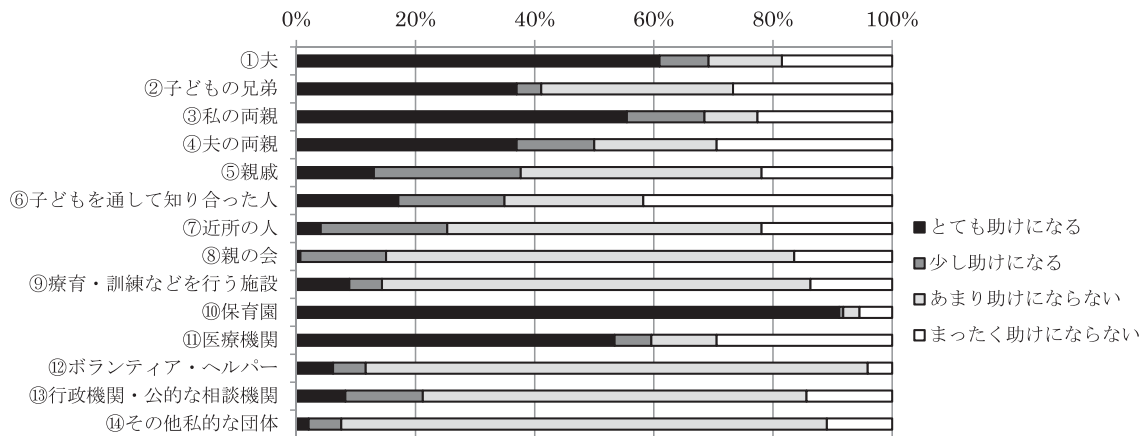


図2 家族サポートにおけるサポート源

0.8点であり、「月に1～2回程度」の段階であった。

④ソーシャル・サポート

結果は表3の通りである。家族サポートの質問内容において、「とても助けになる」の回答数の割合では、「保育園」が91.1%、「夫」が61.0%「私の両親」が55.5%と高い割合を示した。(図2)。

4. 育児ストレスの程度における各要因の比較

育児ストレス認知尺度の得点において、平均得点より低い母親(以下、低ストレス群)77名と高い母親(以下、高ストレス群)69名の2群に分け、各要因での比較を行った。

①対処行動(図3)

育児ストレス・コーピング尺度において、逃避的得点

では低ストレス群は2.0点、高ストレス群は3.0点であり、高ストレス群において有意に高い得点を示した($p<.001$)。調整的得点では低ストレス群は6.1点、高ストレス群は6.0点であり、有意差はみられなかった。

②母親役割(図4,5)

母親役割尺度において、肯定的受容得点では低ストレス群は20.1点、高ストレス群は17.4点であり、低ストレス群において有意に高い得点を示した($p<.001$)。否定的受容得点では低ストレス群は10.1点、高ストレス群は13.4点であり、高ストレス群において有意に高い得点を示した($p<.001$)。母親役割達成感得点では低ストレス群は44.1点、高ストレス群は40.0点であり、低ストレス群において有意に高い得点を示した($p<.001$)。

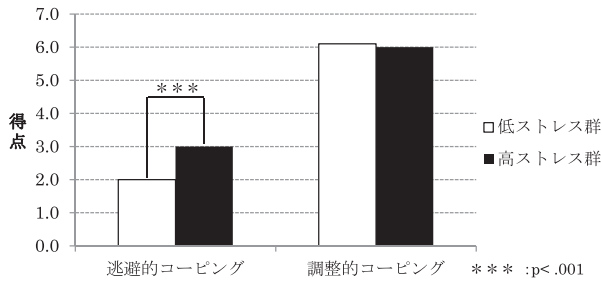


図3 育児ストレス・コーピング尺度

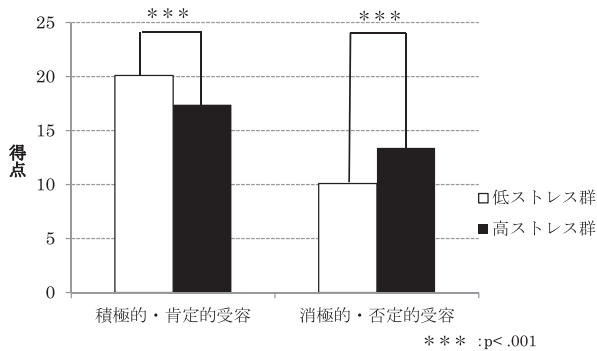


図4 母親役割受容尺度

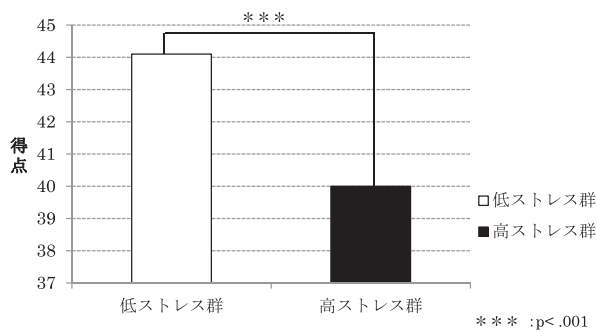


図5 母親役割達成感尺度

③子どもの行動 (図6)

子どもの問題行動測定指標において、低ストレス群の得点は7.4、高ストレス群の得点は8.0点であり、両群において有意差はみられなかった。

④ソーシャル・サポート (図7)

ソーシャル・サポート尺度において、夫婦親密性サポート得点では低ストレス群は20.0点、高ストレス群は17.5点であり、低ストレス群において有意に高い得点を示した ($p < .001$)。家族サポート得点では低ストレス群は34.2点、高ストレス群は31.6点であり、低ストレス群において有意に高い得点を示した ($p < .05$)。実行されたサポート得点では低ストレス群は30.6点、高ストレス群は27.2点であり、低ストレス群において有意に高い得点を示した ($p < .01$)。

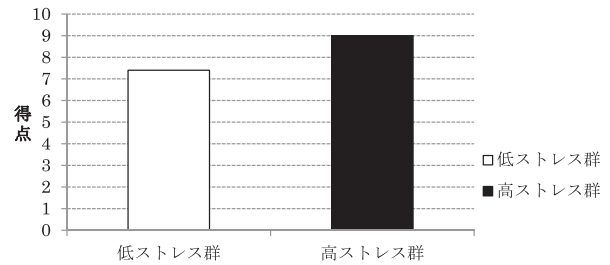


図6 子どもの問題行動測定指標

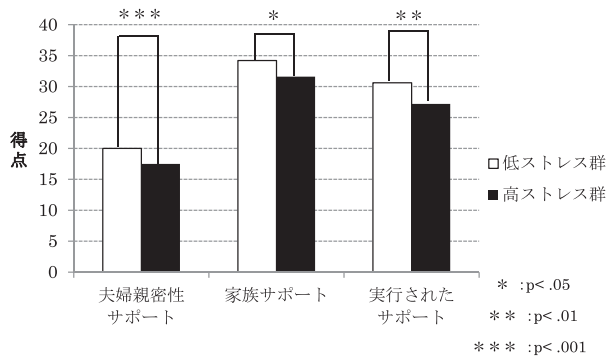


図7 ソーシャルサポート尺度

【考察】

1. 母親の育児ストレスの状態について

育児ストレス認知尺度の質問項目別の平均得点は1.0点であり、本研究の母親の育児ストレスは全体的には「たまにある」段階でありあまり強くは感じられていないが、得点範囲は0から57点であり、母親によっては強い負担を感じているという結果となった。また、質問内容では、「子育てのために、自分自身の自由な時間がとれない」「子育てのために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている」などの自分の社会的役割活動に関する制限感、「子どもの子育てには費用がかかりすぎると感じる」「子育てに必要な費用が家計を圧迫していると感じる」などの育児に伴う経済的ひっ迫感に負担を感じている一方、「子育てがいつまで続くのか、不安になる」「子育てそのものに、苦痛を感じる」「子育てに疲れて、育児を放棄したくなるときがある」などの育児に対する否定感情、「子どもを見るだけでイライラする」などの子どもに対する拒否感情など、子どもそのものに対してはあまり負担を感じていないと考えられる。船越ら¹³⁾は非就労の母親の方が就労している母親よりストレスを感じやすいと述べている。非就労すなわち専業主婦の場合、生活の中で育児の占める割合が強いため、自分の時間が持ちにくいことや社会との接点が少なくなり、孤立感を強めていくことが予想されるが、本研究の母親は就労によって一定の時間育児から離れることができ、また仕事によって社会につながることで、孤立感をあまり感

じないため、子ども自身に対する育児ストレスはあまり強くなかったと考えられる。しかし、就労による社会的活動の制限や生活していくためには働かざるを得ない経済的ひっ迫感に対しては強いストレスを感じていると考えられる。

2. 対処行動、母親役割、子どもの行動及びソーシャル・サポートの状況について

対処行動では、育児ストレス・コーピング尺度の逃避的項目の平均得点は2.5点、調整的項目の平均得点は6.0点であり、調整的項目の得点が高かった。これは、本研究の母親は逃避的コーピングより調整的コーピングを多く利用していることを示している。

母親役割では、母親役割受容尺度の肯定的受容の質問項目別平均得点は3.1点、否定的受容の質問項目別平均得点は1.9点であり、大日向の研究¹⁸⁾ (肯定的受容3.1点、否定的受容1.9点) とほぼ同様の結果であり、母親役割を肯定的に受容している傾向が示された。これは母親としての自分に充実感を抱き、そのような自分を比較的抵抗なく受け入れているためと考えられる。また、母親役割達成感尺度の項目別平均得点は4.2点であり、寺園の研究²²⁾ (4.1点) と大きな違いはなかった。

子どもの行動では、子どもの問題行動測定指標の平均得点は8.2点であった。質問項目別の平均得点は0.8点であり、全体的には「月に1～2回程度」の範囲であり、問題となる行動としては感じられていなかった。榮⁹⁾は育児ストレスの原因として、子どもの聞き分けのない行動が育児ストレスになると報告しており、その中でも「聞き分けがない」「言うことを聞かない」「一人にする」と泣くなどを挙げている。これらは、子どもの行動そのものというよりは母親と子どもとの関係性を示すものである。本研究では子どもとの関わりではなく、子どもの問題となる行動の質問であったため、ストレスにならなかったと考えられる。ただ、本研究でも「こだわりが強い」「指しゃぶり、爪かみ、何でも口に入れるなど口に関する癖がある」「動きが激しく、じっとしていない」の項目などでは比較的高い得点を示しており、これらに母親がどのように関われば良いかについては作業療法などの専門的なサポートも必要である。なぜなら、これらの解決には、子どもの行動を結果のみで見るのではなく、なぜ子どもがこのような行動をするのかを考える必要があり、子どもの行動を発達の視点、環境との相互作用という視点から見ていくことで、子どもの行動の理由が分かり、子どもに上手に関わる方法がわかってくると考えられるからである。

ソーシャル・サポートでは、夫婦親密性サポートの質問項目別平均得点は3.1点、家族サポートの質問項目別

平均得点は2.4点、実行されたサポートの質問項目別平均得点は2.6点であった。北川らの研究²¹⁾ (夫婦親密性サポート2.9点、家族サポート2.4点、実行されたサポート1.9点) と比較して、夫婦親密性サポートと家族サポートは同様な結果を示したが、実行されたサポートは本研究では高い得点を示した。これは、本研究の母親は保育園や家族(夫、実の母親)のサポートを比較的活用できていること、また実質的な援助的言動を多く受け取ったと感じているためと考えられる。

3. 育児ストレスの程度と対処行動、母親役割、子どもの行動及びソーシャル・サポートの関係について

育児ストレス認知尺度における低ストレス群と高ストレス群の2群の比較において、対処行動の逃避的コーピング得点、母親役割の肯定的受容得点、否定的受容得点、達成感得点、夫婦親密性サポート得点、家族サポート得点、実行されたサポート得点で有意差がみられた。育児ストレスによる心身の健康状態の緩衝要因として、コーピングとソーシャル・サポートがあげられる。尾野ら⁷⁾は問題解決など積極的な対処である調整的コーピングは精神的健康度の低下がなく、逃避的コーピングは精神的健康度の低下をきたしやすいと報告している。また、佐々木²³⁾は夫の考え方や夫のサポートは母親の育児に関係し、夫が育児に協力的に参加していると母親は育児に対して肯定的な感情を抱くと報告しており、妻は夫に育児や家事等の実質的な援助が無理でも精神的支援を必要としているとの報告²⁴⁾もある。本研究では、対処行動の逃避的コーピング、ソーシャル・サポートの量と質、母親役割の受容状態が育児ストレスと関連していることが示唆された。

一方、対処行動の調整的コーピング得点、子どもの問題行動測定指標得点では有意差はみられなかった。対処行動の調整的コーピングは、先行研究¹⁷⁾では育児ストレスの軽減につながると報告されているが、本研究の母親は全体的に対処行動として調整的コーピングを利用しており、母親間であまり差がなかったと考えられる。また、子どもの行動に関しては、本研究では子どもの行動自体を母親が問題として感じなかったため、育児ストレスにはあまり影響しなかったのではないかと考えられる。

以上より、本来様々な要因が育児ストレスに関与していると考えられるが、本研究より、その影響の度合いが要因によって異なることが明らかになった。

4. 子育て支援における作業療法の関わりの可能性

小児の作業療法では、主に障がい児を対象としており、子どもの運動、感覚、認知、行動の状態を把握して子どもの特徴を捉え、生活の中でそれらがどのような影響を

及ぼし、どのような問題が生じているかの分析を行い、治療及び支援を行っていく。それとともに、母親に対しても子どもの生活環境（家族、ライフステージ）を考えた上で、日常の中でできる遊びや日常生活へのアドバイスを行っていく。そして、これらは障がい児だけではなく、健常児に対しても可能であると考え。

本研究の結果より、子育て支援において母親の育児ストレスの状態とその関連要因を十分に把握していくことが重要であり、特に育児ストレスが高い母親への専門的なサポートが必要であることが分かった。その一翼を作業療法が担っていくために、母親が困っている育児に着目する、子どもの行動、発達段階、環境のすべての面から捉える、実際の方法を具体的に母親へ提示することが必要であると考え。

【文献】

- 1) 野口純子, 小川佳代, 松村恵子: 乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス - 保育所児と幼稚園児の比較 - . 香川県立保健医療大学紀要2 : 79-86, 2005
- 2) 高橋有里: 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因. 岩手県立大学看護大学紀要9 : 31-41, 2007
- 3) 田中克枝, 板垣ひろみ, 古溝陽子, 他: 福島県A市における1歳6ヶ月児を持つ母親の育児ストレス - 育児ストレス程度の地域比較とA市における関連要因 - . 福島県立医科大学看護学部紀要10 : 9-21, 2008
- 4) 日本作業療法士協会保健福祉部: 乳幼児健康診査(乳幼児健診)・子育て支援に関わる作業療法士の専門性と役割に関する報告. 日本作業療法士協会報告書 : 1-11, 2013
- 5) 本明寛, 春木豊, 織田正美監訳: ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究. 実務教育出版, 東京, 1992, p14-19
- 6) 尾野明未, 茂木俊彦: 障害児をもつ母親の子育てストレスへの対処とソーシャル・サポートについて - 多母集団同時分析による健常児との比較検討 - . ストレス科学研究27 : 23-31, 2012
- 7) 山口(久野)孝子, 堀田法子: 6ヵ月児をもつ母親の精神状態に関する研究(第3報) - 子どもに対する感情および母親役割の受容との関連から - . 小児保健研究64 : 752-759, 2005
- 8) 藤本昌樹, 小堀友子, 鈴木国威, 他: 母親の不安と養育態度, 子ども観に関する共分散構造モデル. 小児保健研究62 : 359-364, 2003
- 9) 榮玲子, 船越和代, 小川佳代, 他: 乳幼児の子どもをもつ母親の育児ストレス(第1報) - 育児ストレス因子の解析 - . 香川県立医療短期大学紀要6 : 11-16, 2003
- 10) 佐藤勢子: ソーシャル・ネットワークは育児負担感を和らげるか?. 福山大学こころの健康相談室紀要5 : 1-9, 2011
- 11) 渡辺弥生, 石原睦子: 乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要60 : 133-145, 2010
- 12) 小原敏郎, 入江礼子, 南 貴子, 他: 育児初期の母親の育児支援のあり方に関する. 検討 - 子どもの発達の变化, 育児サポートとサポート源の関係構造に焦点をあてて. 日本家政学会誌59(7) : 471-484, 2008
- 13) 船越和代, 榮和代, 小川佳代, 他: 乳幼児の子どもをもつ母親の育児ストレス(第2報) - 対象特性からみた育児ストレスサー - . 香川県立医療短期大学紀要5 : 17-24, 2003
- 14) 若松素子, 柏木恵子: 「親になること」による発達: 職業と学歴はどう関係しているか. 発達研究10 : 83-98, 1994
- 15) 新道幸恵: 女性の母性性, 育児観, 母性行動における母娘間の伝承性と社会的環境の影響性について. 文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 2003
- 16) 中嶋和夫, 岡田節子, 斎藤友介: 育児負担感指標に関する因子不変性の検討. 東保学誌2 : 72-80, 1999
- 17) 岡田節子, 朴千萬, 林仁実, 他: 育児ストレス・コーピングの尺度化に関する研究. 静岡県立大学短期大学部研究紀要14 : 255-263, 2000
- 18) 大日向雅美: 母性の研究. 第5版, 川島書店, 東京, 1992
- 19) 土肥伊都子, 広沢俊宗, 田中国夫: 多重な役割従事に関する研究 - 役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果 - . 社会心理学研究5 : 137-145, 1990
- 20) 種子田綾, 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 他: 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係. J.T.H.S 7 : 79-87, 2004
- 21) 北川憲明, 七木田敦, 今城屋隼男: 障害児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響. 特殊教育学研究33(1) : 35-44, 1995
- 22) 寺蘭さおり: 子育て親役割達成感と親の心理的な発達との関連性. 小児保健研究69 : 47-52, 2010
- 23) 佐々木正美: 児童精神科医にみる子育て不安. 現代のエスプリ342 : 28-32, 1996
- 24) 高橋種昭, 高野陽, 小宮山要, 他: 父性の発達 - 新しい家族づくり - . 家政教育社, 東京, 1994, p65-88

The relationship between childcare stress and its related factors among mothers with nursery school children

Kazuhiro Inoue¹⁾, Nobuhiko Yanagida¹⁾, Shinya Fukami²⁾, Yoshikazu Fukano¹⁾

- 1) Department of Clinical Occupational Therapy, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
- 2) Graduate School of Health Sciences, Kagoshima University

Address correspondence to : Kazuhiro Inoue
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
Tel/Fax : 099-275-6737
E-mail : inoue@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

The purpose of this study is to determine the degrees of childcare stress, its related factors, and their relationships among mothers. The subjects were 163 mothers with nursery school children. They were assessed childcare stress, coping behavior, maternal role, the child's problem behavior, and social support. Results revealed that childcare stress about children were not strong so much; however, mothers experienced stress due to their limited social activities as a result of working, and financial difficulties. In addition, the relationship between the degree of childcare stress and its related factors indicated that the extent of the relationship differed according to the factors. Further, the involvement of the child's status and the mother's ability of adjustive coping had only a little effect on childcare stress.

Key words: childcare stress, coping behavior, maternal role, child's problem behavior, social support